

(文献紹介)

Streithofen, Heinrich Basilius / Voss,  
Rüdiger von (hrsg.), *Goetz Briefs  
Ausgewählte Schriften, Erster Band:  
Mensch und Gesellschaft / Zweiter  
Band: Wirtschaftsordnung und  
Sozialpartnerschaft*, Duncker &  
Humblot, Berlin 1980, 869S.

大 西 康 雄

I

ドイツ人ゲッツ・ブリーフス（以下、単にブリーフスと言う）はその85年余りの生涯（1889年1月1日～1974年5月16日）において、実に多彩な活動をした人である。

第一に、招聘されて、またナチスの迫害を逃れてドイツ、そしてアメリカの各地の大学で教員生活を送り、また研究機関の設立に参加したりもした。

第二に、著作・講演活動を盛んに行い、著作も学問的なもののみならずジャーナリスティックなものをも残している。が、その結果、彼の著作は散在してしまい、その一部はもはや入手困難になっている<sup>1)</sup>。

---

1) Cheney の論文 (Cheney, Robert J.: *Goetz Anthony Briefs on the History and Development of Modern Capitalism; A Critical Examination*, Diss., o. O. 1964) を参考にして作成されたエッゲマンによるブリーフスの著作目録 (Broermann, J./ Herder-Dorneich, Ph. (hrsg.): *Soziale Verantwortung*, (Festschrift für Goetz Briefs zum 80. Geburtstag), Berlin 1968, S. 679—696; Niggemann, Jürgen: *Verbändelehre bei Goetz Briefs. Ein Beitrag zu einer allgemeinen Theorie der Verbände*, Berlin 1971, S. 125—141) には、「目録の完備は、それの大きな範囲にもかかわらず保証されえない。」と書き添えられている。

第三に、後に見るように研究領域も多方面にわたっている。が、中心をなしているのは労働組合論であり、本書でも最も多くのスペースが割り当てられている。

## II

本書の出版の契機となったのは、ブリーフスの死に際して「彼の精神的な戦友・同行者、彼の友人たち」(S. 5)<sup>2)</sup>が、解決を迫られている諸問題の討論を盛んにするため、またブリーフスの著作の現代的意義を確認するために本書の出版に合意したことであった。

実際にとられた編集方針は、①ブリーフスに関心のある読者の便宜のために、入手困難なものを集めること、②彼のライフワークに忠実に従って整理すること、③彼の根本思想を明らかにするように努めること、④彼の所説の現代的意義を明らかにするように努めることであった。

## III

上述の事情から生まれた本書の本文は6章44節から成る。

第Ⅰ・Ⅱ章は、彼の研究領域全般の基礎である倫理的諸論考が集められている。そのうち第Ⅰ章では倫理的諸問題、特に限界道徳 (Grenzmoral<sup>3)</sup>) の問題がテーマとなっている。第Ⅱ章は「教会の社会的義務の諸問題」(S. 11)をテーマにしている。

第Ⅲ・Ⅳ章では民主主義論および総合社会政策的 (gesellschaftspolitisch) 問題点がテーマになっている。

---

2) このようにただページ数のみを記した場合は、ここに紹介する文献のページ数であることを示している。

3) 限界道徳の「理論は、日和見主義的な諸個人または諸団体のちょうど今はまだ限界以下ではない、次のような策略を論じている。すなわち、それは法律上の活動の余地内で競争上自身に利益を確保するために使用されるが、だが長期的には正にこの活動の余地を破壊するにちがいが無い。それは経済学の『限界効用学派』の学説の倫理的原理への転用である。」(S. 12)

ところで、彼の労働組合論はこれらのテーマの例証としての位置を占めると言われる<sup>4)</sup>が、それだけにとどまらず、それにもまして、既に述べたように労働組合論は彼の研究領域の中心をなしており、それ固有の重要性を持っている。そこで、労働組合論、およびこれと関連した「企業や経済秩序」(S. 10)の諸問題が第V・VI章のテーマになっている。

最後に、参考のために各章の目次を以下に掲げる。

《第I章：人格とエートス》

ヨーロッパ思想における人格と個体

今日の多元社会のエートス

「限界道德」の問題について

多元社会の限界道德

労働の意味について

《第II章：教会と社会》

カトリシズムの経済・社会政策的理念

キリスト教と社会主義という問題についての原則的なこと

資本主義・社会問題・教会

カトリック社会論・自由放任の自由主義・社会的市場経済

一つの綱領の諸疑念

一通の注目すべき手紙

《第III章：民主主義論》

社会と国家

自由主義と全体主義のあいだの弁証法

民主主義の社会学について

際限なき諸要求——扶養国家と民衆主義

多元論の概念について

諸団体と自由放任の多元社会

アメリカの世紀か？

---

4) Vgl. S. 11.

《第Ⅳ章：自由主義と社会主義のあいだの資本主義》

産業プロレタリアート

一般社会問題と「プロレタリア社会主義」

古典的自由主義

新たな社会的・経済的生成

救济期待と集産主義

宗教戦争の新時代 (以上、第1巻)

《第Ⅴ章：経済と経営》 (以下、第2巻)

経済思想の形成における世界観の諸要素

オートメーションとその諸限界

誤解された企業家

インフレとスタグフレーション<sup>5)</sup>のなかの企業家

労働者の財産形成

秩序と無秩序のあいだの経済

《第Ⅵ章：労働組合論》

古典的労働組合論の批判について

労働組合制度と労働組合政策

労働者と労働運動

岐路に立つ諸労組

労働組合と労働運動

昨今のスト問題

クローズド・ショップ

諸労組の自由が賭けられている

1963年 DGB 基本綱領草案についての批判的諸所見

賃金自治制の諸限界

---

5) スタグネーションの誤りと思われる。(vgl. Briefs, Goetz A.: *Gewerkschaftsprobleme in unserer Zeit. Beiträge zur Standortbestimmung*, Frankfurt am Main 1968, S. 172.)

諸労組の同権的共同決定にたいする七つの異論

諸労組の理論

労働組合論理と共同決定

経済的共同決定の論理と弁証法のあいだ